山﨑亮先生の業績と学風（現時点における）

山﨑亮先生がこれまで発表されてきた研究は、宗教学を中心にして、哲学、思想、民俗学、宗教史、社会学、社会福祉研究など、広範な領域にわたっている。本稿筆者の理解が及ぶ範囲のことではあるが、この機会に少しでもその広がりを紹介するとともに、それぞれの研究が、各領域の専門家を含め、多くの人に読まれるべき深みと厚みを持つことを述べておきたい。

山﨑先生の業績の中心に位置しているのは、エミール・デュルケームと、彼が率いたフランス社会学年報学派に関する諸研究である。

デュルケーム宗教論とその展開を辿った『デュルケーム宗教学思想の研究』（未来社、2001 年）は、この主題に関して唯一無二と言える研究業績である。デュルケームの思想と言えば宗教学でも社会学でも一級の古典とされているが、本書が描き出している、宗教理解の根本的転換をともなう思想的変遷の全体像に触れるならば、従来のデュルケーム解釈がいかに断片的・一面的であるかに気づかされる。

また、『宗教生活の基本形態』の翻訳（筑摩書房、2014 年）は、1930 年代から長らく流布してきた古野清人訳を全面的に刷新するもので、付された詳細な解説や注釈とともに、デュルケーム思想の豊かさを世に知らしめる訳業として、後学への影響も大きい学的貢献である。

さらには、デュルケーム思想の内在的解釈から歩を進め、彼が率いたフランス社会学年報学派の協働作業のようすを再構成した一連の研究がある。当時の書簡の読解を手がかりにして、アンリ・ユベールとマルセル・モースによる供犠論や呪術論の成立過程にデュルケームの指導的関わりが介在していたことや、これらの作業を通してデュルケームが自身の宗教学思想を更新していったことを明らかにした論述は圧巻である。

宗教学の学説史研究に関してはほかにも、日本におけるデュルケーム受容史を考察し海外に紹介した論文（Religion 誌に掲載、2012 年）や、英国初期人類学宗教論の翻訳の刊行（国書刊行会、2023 年）といった業績などがある。

島根県の宗教民俗に関する研究も数多い。隠岐の墓上施設スヤや、出雲の荒神祭祀に関する調査研究は、島根県に残る宗教民俗の実態をとどめた貴重な記録であるとともに、実態の観察を手がかりに既存の民俗学のまなざしを捉えなおす試みでもある。石見の森神研究は、明治初頭の文献史料を綿密に分析したもので、この研究を契機にして、石見地方の民俗史の基礎資料となるべき文書である藤井宗雄『石見国神社記』の翻刻作業も長年にわたって継続してきている（錦織稔之氏も作業に参加）。さらに、たたら製鉄の神である金屋子神社の研究では、新発見の史料として田部家文書から「金屋子神略記」を、比田地域から「金山姫宮縁記」を発掘し、中世にまで時代的視野を広げた考察を行っている。

現代的な問題に切り込んだ研究には、オウム真理教事件をめぐる諸言説を総括して宗教現象へのアプローチ法を追究した論考や、脳死・臓器移植問題を扱って、そこに見いだされる日本的な死生観を分析した一連の考察などがある。ラディカルな障害者運動思想を提示した「青い芝の会」の研究では、その中心人物とされてきた横塚晃一や横田弘の考察にはじまって、彼ら思想の原点をなしている大仏空の宗教思想にまで迫り、近年は、関係者を直接訪ねてその蔵書を探るなど、大仏が遺したテキストの発掘と整理にも力を注いでいる。

山﨑先生の研究は、このように広い領域や主題にわたっているにもかかわらず、「広く浅く」になることがなく、ひとつひとつがずしりとした「厚み」を持っている。その理由として指摘できるのは、第一に、ひとつの主題に向かうに際して、必ず包括的な研究史の把握作業を行っていることである。第二には、新史料の発見や、目録や翻刻の公刊といった業績に示されているように、労をいとわない実地調査やテキスト探索を基礎とした上で、対象の読解や解釈を進めていることである。

それに加えて重要なのは、そのときどきの流行や既存の定説にも、学問分野の壁にも囚われることなく、もっぱら自らの学究心を導きに進められた研究だということである。たしかに各分野のトレンドやキャッチフレーズに結びつけるようなしかたであれば、その研究の「意義」やテーマの選択理由をより分かりやすく説明できるかもしれないが、山﨑先生の研究の歩みは、研究対象と出会い、それと対峙するなかで浮かびあがってくる内在的な必然性にしたがっている。深層における必然性は、研究実践と教育実践とのあいだにも存していて、先生ご自身の学問と、教育学部、法文学部を経て、人間科学部・福祉社会コースへと至った学生教育の場との関わりは、近年活字化されている講義録からもうかがい知ることができる。

これら諸研究を導いている原動力である学究心の具体については、本稿筆者には抽象して表現することができないもの――おそらくは山﨑先生ご自身にとっても言語化しがたいもの――であり、直に著作や論文に接するなかで感じるべきものだろう。さらに言い加えるとすれば、こうした主旋律としての学究心のかたわらに、山﨑先生の仕事には、その資料操作の堅実さや論述の緻密さとは一見裏腹な、一種の反骨精神が流れているように、本稿筆者には思われる。ただし、反骨精神とはいっても、主流派に対するルサンチマンや卑屈さとは一切無縁な、自由で軽やかな種類の、「パンクな」とも形容したくなるような精神である。

どんなときもご自身の好奇心に忠実で、「気が進まずにしぶしぶ取り組んだ研究はない」とおっしゃる山﨑先生にとって、この度の定年退職はさらなる研究深化の機会でもあるにちがいなく、これからのお仕事にますます目が離せない。 **(諸岡了介筆)**